

以下では、日本の鉄鋼業界の主要な出来事を「企業の系譜（合併・改組など）」と「生産量などの定量情報」を軸に、簡易的な“樹形図”形式でまとめています。文字ベースのためやや見づらい点もありますが、時系列と企業の系統が分かるように工夫しています。

日本の鉄鋼業界・系譜樹形図（主要企業を中心に）

以下の図では、左から右（上から下）へ進むにつれ時代が進みます。
（生産量などの数値は概数・代表的な統計値を示しています）

1857年頃 <官営製鉄の萌芽>

└【箱館奉行所による試験製鉄】

└（日本初の洋式高炉による製鉄実験が成功）

～ 明治維新 ～

1874年 <官営八幡製鐵所設立への下地づくり>

└【釜石・山田中製鉄所など民間の高炉操業が活発化】

└ 生産規模：年数千トン程度

1901年 <官営八幡製鐵所（福岡・北九州）操業開始>

└【日本の近代製鉄の本格スタート】

└ 生産能力：年間 約4万トン

1910年代～1920年代 <国内鋼需要の増大、民間企業の設立>

└【大同製鋼（前身は日本製鋼所・滝川工場）や神戸製鋼所など】

└【川崎造船所（後の川崎製鉄）など重工系からの分離独立】

1934年 <日本製鐵株式会社（戦前の国策統合企業）設立>

└【官営八幡製鐵所 + 釜石、室蘭、鹿島など民間製鉄所が合併】

└ 統合後の生産量：年間 約500万トン（1935年前後）

～ 第二次世界大戦期 ～

1945年 <終戦・日本製鐵はGHQの指令で解体方針へ>

└【戦後復興に向けた鉄鋼再編が始まる】

└ 生産量：1946年には年間 約100万トンまで低下

1950年 <日本製鐵が解体完了、「八幡製鐵」「富士製鐵」などに分割>

└【八幡製鐵（旧官営八幡製鐵所中心）】

└【富士製鐵（室蘭、釜石、釧路[りぶ]など）】

└ 日本の粗鋼生産：1950年 約400万トン

1950年頃～高度成長期 <炉の大型化・輸出増加・国内需要拡大>

└ 生産量：

└ 1955年：年間 1,000万トン突破

└ 1960年：年間 2,500万トン前後

1960年代 <各社の高炉増設、国際競争力の向上>

└【八幡製鐵、新日本製鐵堺・君津・大分などの建設開始】

└【富士製鐵、鹿島製鐵所建設】

└ 【川崎製鉄（現JFEの一部）、千葉製鉄所・水島製鉄所建設】

1970年 <八幡製鐵と富士製鐵が合併、「新日本製鐵（旧称：新日鉄）」発足>

└ 【初年度の粗鋼生産：5,000万トン超(国内合計)】

└ 企業としては世界最大規模の粗鋼生産能力を有する

1970年代 <オイルショックを経つつも高水準の生産>

└ 国内粗鋼生産：

└ 1973年：年間 約1億1,900万トン（史上最高水準）

└ 1970年代後半～：年間 1億トン前後で推移

1980年代 <世界的な鉄鋼不況・合理化の進展>

└ 【新日本製鐵をはじめ各社が設備更新・人員合理化】

└ 【NKK（旧・日本鋼管）もエネルギー転換など推進】

└ 【神戸製鋼、大同特殊鋼なども海外提携や特殊鋼分野を強化】

2000年代前半 <国内再編の加速>

└ 2002年：【JFEホールディングス】発足

└ └ (NKK と 川崎製鐵が経営統合)

└ 粗鋼生産：年間 約1億1,000万トン（国内）

2010年代 <グローバル化と大手再編>

└ 2012年：【新日本製鐵】と【住友金属工業】が合併

└ └ 【新日鉄住金】発足（2012～2019）

└ 2019年：社名を【日本製鐵（Nippon Steel）】へ再変更

2020年代 <需要変動とカーボンニュートラル対応>

└ 国内粗鋼生産：年間 8,300万トン前後（2020年頃）

└ CO₂排出削減や電炉化など新技術開発が業界最大の課題に

補足：定量的トピックス

1. 粗鋼生産量の推移（概数）

- 1901年(八幡操業初期)：年4万トン
- 1935年(戦前ピーク付近)：年500万トン
- 1950年(戦後復興初期)：年400万トン
- 1960年：年2,500万トン前後
- 1973年(史上最高)：年1億1,900万トン
- 2020年頃：年8,300万トン前後

2. 主要な企業再編

- 1934年：官営・民営の主要製鉄所を統合し「日本製鐵」を設立
- 1950年：GHQの指令で日本製鐵を分割（八幡製鐵・富士製鐵などに）
- 1970年：八幡製鐵と富士製鐵が合併して「新日本製鐵」
- 2002年：NKKと川崎製鐵が統合して「JFEホールディングス」
- 2012年：新日本製鐵と住友金属工業が合併して「新日鉄住金」
- 2019年：「日本製鐵（Nippon Steel）」に社名変更

3. 戦後の高度成長と世界シェア

- 1960年代後半～1970年代前半：日本の粗鋼生産は世界トップクラスに躍進
- 1970年代半ば：オイルショック後の鉄鋼不況で生産調整が進むも、技術力や省エネ化などで国際競争力を維持

4. 現代の課題

- 国内需要の減少・海外需要の取り込み
- CO₂削減や電炉化、水素還元製鉄など環境対応の強化
- 国際競争力維持のための設備投資・海外現地生産拠点の拡充

上記のように、**日本の鉄鋼業界**は明治期の官営事業から始まり、戦時統合による「日本製鐵」の成立、その戦後分割、そして高度成長期を経た大手の合併・再編へと至る流れで大きく変遷してきました。その過程で世界トップクラスの生産量を達成した一方、近年はグローバル競争・環境対応などの課題への取り組みが一層重要になっています。